

生活科の誕生

馬居 政幸 (静岡大学教育学部助教授)



キーワードで語る授業研究運動史

一 はじめに
新教科・生活科の誕生を、戦後授業研究史上にどのよう位置づけるか。これが本稿に与えられた課題。問題は三つあると考える。

一つは、生活科がいかなる授業研究の歴史に基づき誕生したか。戦後四十数年の実践を経ての初めての教科の新設である。何と比較しての「新」なのか。生活科以前の授業研究との連続

・非連続を問わねばならない。
二つは、全国の小学校で日々実践されている実際の生活科の授業の位置づけ。新指導要領への移行期二年目。既に生活科の授業実践は、文部省の指定校から全国の小学校へと広がりつつある。それをどのように評価するか。
三つは、生活科の授業と研究の他教科への影響。生活科はあくまで一教科の問題なのか。小学校教育全体にかかわるものなのか。その答えは授業のレベルで問わなければならない。

二 なぜ「新教科」なのか

生活科は授業のパラダイムシフト

通常、生活科は、教育課程審議会を代表に、二十年以上の検討期間を踏まえて設置した、とされる。教育行政の観点では連続性が重視されるのである。しかし、私は、授業(研究)の観

点からみる限り、生活科はそれ以前の授業とは非連続であると考える。

その理由は次の中野重人の言葉。
「我が国の伝統的な授業の在り方を改善し、新しい授業を創ることを生活科に期待している。生活科が伝統的な授業観を変革し、授業を変えることができればと願っている。その改善すべき授業とは何か。それを筆者なりに端的にいえば、『全国どこでも同じことを、よく知っている教師が知らない子どもに教えるのが授業である』という授業観であり、教育観である」(『社会科教育』No.344「分かりやすく説得力ある谷川提案」より)

現行の指導要領は合科的指導の推進を明記している。だが全国の小学校が積極的に試みたであろうか。中野の生活科への思いは、教育行政上の論理とは別に、授業観に関する限り非連続と考える。生活科は、低学年の理科や社会科に代わり新名称の教科が既存の数

科に加わったのではない。「新しい授業」が生まれたということである。

では連続面はないのか。二つ指摘したい。一つは初期社会科。「初期社会科は、子どもの生活そのものを変えること、すなわち、子どもの生活や学習を、教師の手から子どもの手に取り戻し、子ども自身が、子どものペースで学習や生活を創りだすことをめざしていた」(『Part II』No.7「学校に活力をもたらす生活科を」とする日臺利夫の視点)が代表であろう。問題は教科の名称ではなく授業のあり方。教師と子どもの間に交換される教育的行為の質。社会科新設時の夢を生活科に見出す授業者は少なくないと考える。

三 「新しい授業」が提起するもの

しかし私はもう一つ指摘したい。法制化、ネットワーク、連続セミナー等に集った若い教師を代表とする現場教師の「授業づくり」への運動と情熱と

その授業観である。

授業研究から授業づくりへ

研究の蓄積は既存の枠組みを精緻化するが、枠組み自体の変革を困難にする。それを象徴するのが生活科批判者の多くが研究者であったこと。先にパラダイムシフトと記した理由である。

だが若い教師にとって授業は研究ではなく「つくる」対象。「技術」への欲求は子どもとの格闘の結果生まれたはず。子どもが見えないと嘆くより、子どもを知る「ヒント」を創造する「ネットワークづくり」を選んだのではないか。ここに生活科と同質の授業観があると私は考える。このような「授業づくり」の土壌が広範になければ、生活科の新しいさも、中野の思いも、画餅に終わっていたのではないか。

では、生活科の授業自体が生み出したものは何か。今、全国の実践者の思

いは次のようなものではないか。

教師と教科書と教室と時間割ではなく、まず、子どもの生活を

生活科の授業は、教師と子ども達との出会いから一つひとつ創造されるもの。子どもに何をいかに教えるか(教材構成)ではなく、子どもとどこで何をしようか(活動構成)が課題。他方、初期社会科の目的は、子どもを通じての旧習に覆われた日本社会の改変。学校と教師はあくまで正しく善なる存在である。新教育創造への夢は共通だが、両者の授業の意味は異質と考える。

だが生活科は未だ実践途上。社会科のように現実と妥協せざるを得なくなるか。逆に現実を創造する授業実践を生み出すか。答えは移行期後。全国の小学校で一斉に実践される明年から。その意味で冒頭に示した三つ目の問題は不確定。勝負はこれからである。

特集 キーワード・戦後授業研究運動史

●戦後授業研究のオビニオンリーダーの証言●

教師の自立をめざす授業研究	重松 鷹泰	5
生きて働く学力をつけたい	広岡 亮蔵	7
授業改善技法を求めて	坂元 昂	9
変革期の授業研究	木原健太郎	11
授業を「見る」から授業を「つくる」ことへ	吉本 均	13
真の共同研究と集団思考を求めて	鈴木 秀一	15

二元論から「関わり合う」関係論へ―戦後授業研究運動小史― 上野ひろ美 17

●論争史からみた授業研究の争点

コア・カリキュラム論争	奥住 忠久	27
問題解決学習論争	佐伯 正一	30
教育内容の現代化論争	柴田 義松	33
生活綴方論争	磯田 一雄	36
「読・書・算」基礎学力論争	藤岡 信勝	39
出口論争	有園 格	42
「能力主義」「多様化」論争	今野 喜清	45
●キーワードで語る授業研究運動史		
経験学習論	園田 貴章	48
系統学習論	白井 嘉一	50
陶冶と訓育の統一	豊田 久亀	52
「教科の論理」と「生活の論理」	小田切 正	54
発見学習	水越 敏行	56

集団主義的教育……………杉山 明男 58

仮説実験授業……………庄司 和晃 60

教育工学……………中野 和光 62

教育技術の法則化……………安彦 忠彦 64

生活科の誕生……………馬居 政幸 66

●戦後授業研究に影響を与えた研究者●

デューイ……………久田 敏彦	68	宮坂哲文……………大西 忠治	74
ブルーナー……………佐藤 三郎	70	齋藤喜博……………松平 信久	76
オコン……………大橋 精夫	72	廣岡亮蔵……………齋藤 勉	78

「研究をリードした実践者」寸評……………樋口 雅子 82

●教育ニユース・ス・ムアヲ

全日中調査・学校週五日制の在り方	安達 拓二	84
文部省調査・教職員団体の組織実態		

●連載／論壇時評・17●実践論文の評価……………齋藤 勉 92

●連載／教育技術の論理 教育方法の定型化は悪いのか・5●「教育技術」とは何か (3)……………岡本 明人 96

★現代の基礎学力問題・5	鈴木 秀一	101
★授業の知的組み立て方・5		
★一年国語の授業(中)……………	向山 洋一	106

●連載／子どもをとらえる技術・5●「カルテ」と「学級通信」に見る子どもをとらえる技術(2)……………谷川 彰英 111

(表紙写真提供・御七ノ下)(C)